

PREVENTION No.345

2022年9月15日開催

ギャンブル依存 最近の動向について 古野 悟志(独立行政法人国立病院機構久里浜医療センター)

【はじめに】

問題ギャンブルにおける精神疾患としての診断については、1970年代より、コントロール喪失の特徴（行動制御・衝動制御の問題）を持つ疾患として認識され始め、分類されてきた。現在では、「行動制御の問題」から「嗜癖の問題」の分類に変わってきている。

日本国内で、ギャンブル障害を疑われる者は、生涯有病率で3.6%（樋口ら2017）と報告されている。調査方法などによりこの値は変動するものの、概ね日本は諸外国よりも高めの結果であることが多い。

【ギャンブル・ギャンブル依存における最近の動向】

行われているギャンブルの種類に関して、ここ数年で様相が変化してきている。従来、日本ではパチンコ・パチスロが大きな割合を占めていた。しかし近年、オンラインでギャンブルを行う傾向が、強まっている。主にスマートフォンで、競馬・競艇・競輪・FX・オンラインカジノを行うという割合が、高くなってきている。

ギャンブル行為の継続に関連する要素として、アクセス性が挙げられることが多いが、以前は「物理的距離」が近いという点が挙げられていたと思うが、現在は「即時性・即反応性」という意味合いに変わってきていると思われる。この即時性・即反応性を備えてしまった点は、問題悪化のスピードも速くさせている印象がある。初回の受診までの年齢・期間も徐々に短くなってきている印象である。なお、パチンコ・パチスロによる相談は、減少傾向である。これは、規制などの影響が出た面も考えられると共に、コロナ禍の影響、オンライン化の影響、他のギャンブルの方がより刺激的（ハイリスク・ハイリターン）に映る面などが、複合的に関連していると窺われる。

なお、主とするギャンブルを変えず・オンラインのギャンブルを行わない、受診患者ももちろん存在している。現在までの調査を加味すると、断言はできないものの、オンライン利用のギャンブルは若年の方が選択しやすい傾向が窺われる。また、オンラインのギャンブルを行う人の方が、借金が高額になる傾向が窺われる。（外れ値のように極

端な高額の借金をつくる人が、オンライン使用のギャンブルの場合には見られている。)

さらに近年、ネットゲームのガチャやアイテムなどを目的とした課金や、ネット上のクレーンゲームの景品を取ろうとした課金、といった相談ケースも見られている。ギャンブル障害とゲーム障害の特性や特徴が混合しているような様相である。

社会の動向や情勢、技術の進歩などによって、依存の仕方や依存の問題形成の過程にも影響が生じるだろう。そのため、実際に予防法や対処法を検討するには、そのシステムや実情をある程度を理解していく必要も出てくるだろう。(例えばスマートフォンの使用の仕方について、検討するような場合に。)

【おわりに】

上記のように最近の動向を紹介した後、ギャンブル障害の標準的治療プログラムについて紹介した。これは認知行動療法をベースとした内容となっており、AMEDにおいて、効果検証がなされた内容である。依存症の回復をめざす内容として、以前から共有されている蓄積・対処方法を主に盛り込んだ内容である。今後、それに加えて、ネット環境をはじめとした社会面・環境面の変容に対応もした更新を行う必要もあるだろう。